



BUKKYO UNIVERSITY

教授法

開発室

だより

vol.13

編集／教授法開発室
発行／佛教大学
発行日／2005年11月1日
〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96
TEL.075-491-2141 FAX.075-493-9019

URL <http://www.bukkyo-u.ac.jp/>

2005年度 教授法開発室活動方針

教授法開発室 室長 松本真治

今年度より原清治先生のあとを受けて、教授法開発室室長に就任いたしました。前任の原先生は教育学のスペシャリストですが、私は英文学関連の雑文を書きながら、その傍ら英語教育をかじっているという程度です。従いまして、教育学という正統派の視点からではなく、今までとは違った視点から本学のFD活動の推進のお役に立てればと思っております。今年度は清水教学担当副学長、寺内教学部担当部長のお二方が、榎本教学部長とともにFD活動の最前線に参加していただいております。

さて、2005年度の活動方針ですが、ポリシーとしては「FD活動の成果を具体的な形で教職員に還元する」としています。従来より発行してきましたこの『教授法開発室だより』は学内だけではなく学外への広報的役割を果たしてきました。すでに4月の『学内報』より掲載しておりますが、あらたに「FD Bulletin」によって、いち早いFDニュースをお届けします。また、1年間のFD活動を総括し、その成果を還元する媒体として、アカデミックな内容を中心とする『FD Review』(仮称)の発行も計画しております。

「FD Bulletin」Vol. 2(『学内報』5月号掲載)でもお知らせしましたが、今年度は前年度までの3部門を改編し、以下の4つの部門に分かれて具体的な教授法開発室活動を展開します。

1) 科目関連部門

- ・全学共通科目のうち必修科目(「ブッダの教え」「法然の生涯と思想」「情報機器の操作」)における教授法の検証。
- ・外国語科目(「英語」「中国語」「朝鮮語」「フランス語」「ドイツ語」)の検証。当面は継続実施中の英語基礎力調査をもとに、全学的な英語力の検証を中心に行うが、他語種についても検討。また、外国語科目専用の授業評価アンケートの作成検討。

2) 授業関連部門

- ・従来より実施している授業評価アンケートの集計および分析。アンケート項目内容の再検討。
- ・授業公開の実施。昨年度も2講義について授業公開を実施したが、今年度はより多くの授業公開を実施し、より多くの教員の参加を求める。また、物理的に授業公開に参加する

ことのできない教員のことも考慮し、ビデオ・ライブラリー化も検討。

- ・授業評価アンケートと授業公開をもとに、全教員に対し授業改善のための情報を還元。具体的には公開シンポジウム開催や教授法マニュアルの作成。

3) 情報関連部門

- ・試行から3年過ぎたI-supportの活用方法の検証。またITの全学統一化を視野に入れた検討。

4) FD部門

- ・大学コンソーシアム京都でのフォーラム等を中心に、学外でのFD活動についての調査・研究。
- ・他大学の動向調査。
- ・授業評価アンケートでは見えてこない、学生からの生の声を何らかの形で拾い上げ、授業改善の一助とすることを目的とした「目安箱」設置の検証と発議。
- ・室員以外のFD活動に対する忌憚のない意見を、刊行物を通して紹介することを目的としたFDインタビューの実施。

4月よりすでに各部門の活動ははじまっており、それぞれの成果が期待されますが、部門によっては長期計画でじっくりと取り組まなければならないものもあります。今年度は上述の活動の中でも「授業公開」を教授法開発室全体の重点課題としていきます(「FD Bulletin」Vol. 3[『学内報』6月号掲載]参照)。すでに今年の11月から12月にかけての実施という方向で具体的な調整活動に入っております。「授業公開」を今年度の重点課題とした理由は、原点に立ち返り、FD活動の中心をその本来のターゲットである 授業 に据えたいと考えたからです。さまざまな分野において、授業学の確立が急務として叫ばれています。同様に、本学においても独自の授業学の確立は急務であることは多くの教職員の方々が感じておられるのではないのでしょうか。当然のことながら、私一人でFD活動を展開できるわけではありません。室員のメンバーはもちろんのこと、佛教大学全教職員が一丸となっはじめて、全学的なFD活動が可能となります。より良い授業を求めて、今後とも教職員の皆様のご指導とご協力をお願い申し上げます。

「基礎学力調査」の結果

1. 調査の概要

教授法開発室では本学学生の総合的な基礎学力を把握することを目的として、平成12年度の新入生より基礎学力調査を実施している。今回はその6回目にあたる。試験問題には全国規模の就職対策試験を使用した。調査は1回生と3回生を対象にして実施し、両者の違いをみた。また、3回生は平成15年度の入学時にも同一形式の試験を受けており、平成15年度と平成17年度のデータを比較することができた。

なお、学生には個人別データが送付され、ひとりひとりが全国レベルで学力の相対的位置を確認することができる。また、学生は卒業後の志望分野に応じて学習上のアドバイスを得ることができるようになっている。

2. 調査の時期および対象者数

(1) 1回生

調査時期 平成17年4月4日(新入生オリエンテーション時)

調査対象 1,427名(回答率93.1%)

(2) 3回生

調査時期 平成17年4月6日(在学生オリエンテーション時)

調査対象 946名(回答率60.9%)

3. 設問内容

今回の調査はA社の一般常識試験対策テスト(平成14年度より継続使用)を用いた。制限時間は40分で、設問は120の小問から構成されている。設問の内容はこれまでと同じく「基礎常識」と「社会常識」とに分けることができる。基礎常識は高校の5教科に対応する「国語」「数理」「英語」「社会」の4科目、社会常識は社会人として心得ておくべき「日常生活」と「時事問題」の2科目から成る。

基礎学力調査の科目構成

基礎常識：高校までに学習してきた科目に対応
「国語」「数理」「英語」「社会」

社会常識：社会人としての知識と教養
「日常生活」…… マナー・敬語、暦や習慣・生活習慣、
文の照合・図形の並べ替え

「時事問題」…… 政治・経済、文化・科学、
社会・芸能・スポーツ

以下、実際の設問をいくつか示してみる。

(1) 正答率の高かった設問は高校の学習科目の基本問題に相当するものである。例えば「His camera is()than yours.」にgoodの比較級を補う問題、「問題をシンギする」でカタカナを漢字に直す問題、「方程式： $-2(3X-7)=-X-6$ 」の解を求める問題、「選挙投票日に投票できない時に、前もって投票できる制度」は何かを選択する問題、「植物の光合成は細胞のどの部分で行われるか」を選択する問題である。これらの問題の正答率はいずれも90%を越えている。

(2) 正答率の低かった設問は「時事問題」のグループに多かった。例えば「2003年10月、マレーシアの第5代首相に就任した人物名を選択させる問題」「家庭での使用済みパソコンの回収をメーカーに義務づける」法案を選択する問題、「海外直接投資」の英語表記を選択する問題である。これらの問題の正答率は10%以下であった。

(3) 3回生が1回生より正答率が高かった設問は、時事問題や日常生活のグループに多かった。例えば、沢たまき氏の芸能活動に関する問題(3回生正答率40%、1回生正答率28%)、メーリングリストの機能に関する問題(3回生正答率64%、1回生正答率43%)、「()行方正(行いの正しいこと)」の四字熟語に漢字を補う問題(3回生正答率50%、1回生正答率41%)などである。

(4) 3回生が1回生より正答率が低かった設問は、英語と国語の基本問題に多かった。5ポイント以上の差が開いた問題は、英語が8問、古文やことわざの意味を選択する問題が2問、歴史の問題が1問だった。そのなかでも、英文法や英熟語の問題で10ポイント以上の差が開いた問題が3つあった。

4. 1回生と3回生の傾向

調査に用いたテストは通年に亘って全国の大学で実施されており、その実施時期によって問題が多少異なっている(とくに「時事問題」の設問が異なる)。そのため、全国と本学を素点で比較することが難しい。そこで、便宜上、T得点(標準得点が50.0の偏差値に準ずる標準化得点)を用いて本学学生の特徴をみることにする。ここでT得点を用いる利点は、全国レベルで本学学生の相対的位置が把握しやすい点である。

表1より科目別に1回生の傾向をみると、T得点が高い順に、「国語(51.3)」「数理(50.5)」「英語(49.8)」となっており、高校の主要3教科に相当する基礎常識の得点が高い。3回生のT得点でも、同様の傾向がみられるが、1回生と比較して「英語(47.7)」のT得点がやや低く、「日常生活(49.5)」のT得点がやや高くなっている。ただ、1回生、3回生とも「時事問題」の得点が他の科目より5ポイントほど低く、全国レベルで平均を大きく下回っている。

3回生は就職対策用に調査を受けていると考えられる。それにもかかわらず、「時事問題(44.9)」のT得点が全国平均より5ポイント低く、1回生のレベルをわずかに上回る程度である。平成12年度からの基礎学力調査(平成12年度と平成13年度はB社の問題を使用)を参考にしてもほぼ同様の結果が得られている。すなわち、過去6年間の傾向をみると、本学の学生は入学後も「時事問題」の知識をあまり身につけていないことがうかがえる。

平成14年度以降の4回分の基礎学力調査(1回生と3回生が同一問題を回答)で「英語」の傾向をみると、どの年度も1回生が3回生より得点が高くなっている。1回生の「英語」のT得点は全国と比較しても平成14年度から平成16年度まで上昇が続いていたが、平成17年度の新入生では「英語」の上昇が止まったようである。「英語」の設問内容は、基礎的な文法や語句の問題、英作文、文章読解から成っており、1回生

「基礎学力調査」の結果

は英語の基礎的問題や英作文の正答率が高かった。

表1 T得点の平均値(回生別)

回生	科目 全科目	基礎常識				社会常識	
		総合	国語	数理	英語	社会	日常生活
1回生(1427人)	47.4	51.3	50.5	49.8	47.1	47.3	43.1
3回生(946人)	48.0	51.6	51.4	47.7	47.2	49.5	44.9

5. 入試種別の比較

1回生を入試種別に分けると基礎学力に差がみられる。平成17年度は10種類以上の入試種別があり、1回生の基礎学力の差はかなり大きい。表2で、1回生をグループ分けしてみると、試験組(A日程、B日程、センター入試)と推薦組(公募制推薦、推薦A、その他推薦)とで基礎学力に差がある。

全科目総合のT得点で比べると、平均値が高い方から、センター入試(56.8)、A日程(50.3)、B日程(49.3)の順であり、試験組全体で52.1の平均値を示している。これに対して、推薦組全体の平均値は43.1である。科目別でもすべて入試組が推薦組よりT得点の平均値が高い。社会常識の科目は試験組も推薦組と同様に得点が低くなり、とくに「時事問題」は試験組、推薦組とも全国平均をかなり下回る。

表2 1回生のT得点平均値(入試種別)

入試種別	科目 全科目	基礎常識				社会常識	
		総合	国語	数理	英語	社会	日常生活
A日程(464人)	50.3	53.6	52.0	52.3	49.3	49.4	44.2
B日程(276人)	49.3	53.0	52.1	52.6	48.1	47.8	42.9
センター試験(35人)	56.8	57.3	58.2	55.4	53.2	55.3	48.1
試験組	52.1	54.6	54.1	53.4	50.2	50.9	45.1
公募制推薦(306人)	46.7	52.2	49.5	49.2	46.0	46.5	43.0
指定校推薦(224人)	43.4	47.6	48.1	45.4	44.8	45.3	42.0
その他推薦*(67人)	39.4	42.5	46.7	42.0	42.3	42.5	41.2
推薦組	43.1	47.4	48.1	45.5	44.4	44.7	42.1

(注) 宗門後継者、AO選抜、留学生、編入生等の各種入試は学生数が少ないので省略

表3で、3回生をグループ分けしても、試験組と推薦組とで基礎学力に差がみられる。総合得点は、センター入試(55.3)、B日程(50.8)、A日程(50.7)の順で高く、試験組全体でT得点の平均が52.3である。これに対して推薦組全体のT得点は44.2と全国平均を大きく下回っている。ちなみに、現3回生が平成15年度に1回生時に受けた基礎学力調査と比較しても、同様の結果が得られている。

表3 3回生のT得点平均値(入試種別)

入試種別	科目 全科目	基礎常識				社会常識	
		総合	国語	数理	英語	社会	日常生活
A日程(400人)	50.7	53.4	53.4	49.9	48.8	51.4	46.0
B日程(113人)	50.8	52.8	54.9	51.9	47.8	50.2	45.8
センター試験(30人)	55.3	56.0	57.6	55.1	52.7	55.3	44.8
試験組	52.3	54.1	55.3	52.3	49.8	52.3	45.6
公募制推薦(215人)	44.7	50.0	47.9	44.6	45.3	47.7	43.5
指定校推薦(132人)	43.2	48.3	47.5	43.2	44.9	45.7	43.4
その他推薦*(30人)	44.7	49.0	49.6	43.4	44.2	47.9	45.4
推薦組	44.2	49.1	48.3	43.7	44.8	47.1	44.1

(注) 宗門後継者、留学生、編入生の各種入試は学生数が少ないので省略

6. 入学後の基礎学力の変化

表4は、3回生の入学時調査(平成15年度)と今回調査(平成17年度)とを比較し、基礎学力の伸び率を学科別に示したものである(数値は平成17年度のT得点から平成15年度T得点を引いて算出)。全科目総合で伸び率の高い学科は教育学科、社会学科、英文学科の順になる。教育学科と史学科の3回生は入学時点で全科目総合のT得点が高かったが、3回生時にはさらに得点を伸ばしている。社会学科、英語英米文学科、健康福祉学科の3回生は、入学時点のT得点はあまり高くなかったが、3回生時点で基礎学力がかなり上昇している。

各学科の特徴を科目別にみると、教育学科は「数理(10.4)」と「英語(5.8)」の伸び率が全学科のなかで一番高い。社会学科は「日常生活(9.8)」、「国語(5.4)」、「社会(3.3)」の伸び率が全学科のなかで一番高い。生涯学習学科は「時事(8.6)」の伸び率が全学科のなかで一番高い。多くの学科では学科の特徴にみあった科目の伸び率が高くなっている。

表4 3回生の入学後の伸び率

学科	科目 全科目	総合	国語	数理	英語	社会	日常生活	時事問題
史学	7.6	3.8	4.4	3.0	3.1	9.6	6.6	
日本語日本文学	6.8	4.4	3.7	2.2	2.4	8.2	6.5	
中国語中国文学	5.3	4.0	1.8	1.6	0.1	6.1	7.3	
英語英米文学	8.1	3.6	4.9	4.8	2.1	9.4	7.3	
教育	8.6	3.7	10.4	5.8	1.4	7.3	6.1	
生涯学習	6.3	5.2	-0.2	3.6	1.8	6.1	8.6	
臨床心理	6.2	2.1	2.3	3.2	2.4	6.6	8.2	
社会	8.2	5.4	4.7	3.8	3.3	9.8	6.0	
応用社会	-0.5	-1.3	-1.5	-2.8	0.1	0.6	3.1	
社会福祉	4.8	1.6	1.8	1.3	0.8	7.1	6.3	
健康福祉	7.1	3.3	4.4	2.7	1.5	9.2	7.4	

7. 課題

新入生の基礎学力は入試種別に差があること、また、本学に入学後も入試種別の学力差があまり縮まっていないことが確認できた。全学的レベルでは、「英語」の基礎力を伸ばすことと、社会常識の中でもとくに「時事問題」の知識を身につけさせることが課題になろう。しかし、過去の基礎学力調査の結果からも、学生は入学後、学科にみあった学力を伸ばしていることがうかがえる。学生の基礎学力の伸びは、学科もしくはコースごとに特色ある教育を行うことと関連していると推測できる。

これまでの基礎学力調査は大学教育の成果を直接調べる問題ではなく、就職試験を意識した問題で構成されている。そのため、佛光大学の教育効果を調べるためには、大学独自の基礎学力調査を開発していくことが必要であろう。

< 文責：近藤敏夫 集計：山本理絵 >

2005年度 TOEIC Bridgeテスト利用による英語基礎力調査

実施日：2005年4月4日(月)

実施対象者：新1回生(文学部、教育学部、社会学部、
社会福祉学部)

有効受験者数：1,424人

平均点：122.4点

1) 英語基礎力調査

昨年度より実施の新カリキュラムでは、一学年あたり1,000人以上の学生が英語を必修外国語として履修し、単位数も旧カリキュラムの6単位から8単位へと引き上げられている。また、就職部では引き続きTOEIC IPテストが実施されていることからわかるように、国際化が叫ばれる昨今、卒業後の英語力の必要性は否めないであろう。このような状況にあって、本学学生の全体的な英語力を把握すること、各学生の英語学習支援を目指し、教授法開発室では昨年度に引き続きTOEIC Bridgeテストを利用し、新入生を対象とした英語基礎力調査を実施した。

TOEIC Bridgeテストの結果は、トータル・スコア、セクション・スコア、サブ・スコアという形で受験者に返却される。このデータをもとに、各学生は自分の英語力を客観的に評価し、どの分野が得意で、どの分野が苦手なのかを確認することができ、今後4年間の学修計画に役立てることができる。

2) TOEIC Bridgeテスト

TOEIC Bridgeテストとは、初・中級レベルの英語コミュニケーション能力測定のために開発されたテストであり、TOEICテストよりも平易で、日常的な身近な内容が出題されている。分量的にもTOEICテストの半分、リスニング・セクション(25分・50問)とリーディング・セクション(35分・50問)の合計1時間・100問で行われ、スコアは2点刻みで、各セクションとも10点～90点、トータルで20点～180点という形で表される。

TOEIC Bridgeの実施・運営を行っている財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会TOEIC運営委員会によれば、TOEICスコア450点以下がTOEIC Bridge受験の、そしてTOEIC Bridgeスコアが160点に達した場合をTOEIC受験の目安として提示している。しかしながら、TOEIC運営委員会は、TOEICスコア450点とTOEIC Bridgeスコア160点には

相関関係はないとしている。

さらにTOEIC Bridgeテストには「Listening Strategies(聞く技術)」「Functions(言葉のはたらき)」「Reading Strategies(読む技術)」「Vocabulary(語彙)」「Grammar(文法)」の5分野にわたる3段階評価のサブ・スコアがつけられている。なお「Functions」とは、「どのような目的と意図(例：何かの申し出・要求・時間を伝える・指示・情報収集など)で英語が使用されているのか」を理解する能力である(TOEIC Bridgeホームページ参照)。

3) 新入生の英語力

新入生の英語力であるが、表1のような結果となった。また、スコアの分布に関しては図1のとおりである。なお、本来の受験者総数は1,428人であったが、4人の受験者が遅刻のため、リーディング・セクションのみの受験となったので、この4人は除外し、有効受験者数を1,424人として集計している。

この1,424人の受験者のうち、これまでにTOEICテストの受験経験のある者はわずかに17人であった。まったくの偶然であるが、昨年度の有効受験者数1,469人のうちTOEICテスト受験経験者も17人であった。わずか2学年分のデータでしかないが、本学への入学者の間ではTOEICテストはほとんど浸透していないと言えよう。ちなみに今年度の英語基礎力調査受験者で英検の受験経験者は、半数を超える789人であった。

そこでトータル・スコアの平均122.4点をどのように考えるかであるが、昨年度同様に受験者がテストの形式に不慣れなために、普段の実力を出し切れていないということも考えられよう。なお、昨年度は社会福祉学部の学生の受験した教室の音響状態がよくないというアクシデントもあったが、今年度は教室環境による影響はなかったと言ってよい。総体的には、TOEIC受験への移行の目安となる160点を下回っているということやスコアの分布から判断すると、新入生の英語基礎力の測定方法としてTOEIC Bridgeテストが相応しい尺度であったと言える。図1からわかるように160点以上のスコアを取った受験者はわずかに7人、TOEICテスト初受験を考慮して150点以上の44人を加えても、全体の約3.5%を占めるに過ぎない。さらに140点台を加えても約15%程度である。

昨年度のトータル・スコア平均の117.6点と比較しても、受験者がまったく異なるのであるから、あまり意味のない比

2005年度 TOEIC Bridgeテスト利用による英語基礎力調査

較としかならない。しかしながら、昨年度と今年度の英語基礎力調査の結果から判断して、大学卒業新入社員の平均点にあたるTOEICスコア450点や新カリキュラム「英語」の到達目標であるTOEICスコア500点が、本学の英語教育の目指すべきものであるということは十分に確認できた。

4) 英語力の傾向

リスニング・セクションのスコア平均が58.6点、リーディング・セクションのスコア平均が63.8点であり、昨年度同様、ややリスニングの方が低いようである(表1)。サブ・スコアを眺めても、昨年度と同様の傾向が見られる(表2および表3)。当然のことであるが、リスニング・セクションに関係している「Listening Strategies」「Functions」のスコア平均が、リーディング・セクションと関係した「Reading Strategies」「Vocabulary」「Grammar」よりも低いということと、さらに、リスニングに関しては「Functions」が、そしてリーディングに関しては「Reading Strategies」がやや劣っているという、これら2つの特徴は昨年度と変わらない。

5) 今後の課題

今回の英語基礎力調査の結果から総合的に言えることは、本学への入学生は総体的にリスニング、リーディングともに、言語の知識や基本的な能力は備わっているのだが、実際に言語を運用するという点で弱いという傾向にあるということであろう。「英語の音声を聞き分けることができる」、「語彙・文法を知っている」だけではなく、その知識・能力をいかに実践の場で発揮できるのかということが、今後の各学生の学習のポイントであると同時に、本学の英語教育が重点的に取り組んでいかなければ課題である。

昨年度と今年度では新入生の英語力に関して同じような傾向が見られた。だからと言って、これからも英語に関しては同じような傾向の学生が入学してくるだろうと安易に想像することはできない。なぜなら、中学校・高等学校における英語科の学習内容が年々変化しており、今後、英語の基礎的な知識よりも実際の運用能力に秀でた学生が入学してくる可能性も十分ありうる。常に新入生の実態を把握しながらカリキュラム運営に反映させていくことは不可欠なことであろうし、そのためにも英語基礎力調査の意義は大きいものと思われる。

< 文責：松本真治 >

表1 新入生全体のスコア(1,424人)

	TOTAL	LISTENING	READING
平均点	122.4	58.6	63.8
標準偏差	17.5	8.4	11.0
最高点	168	88	86
最低点	38	20	12

図1 新入生全体のスコアの分布(1,424人)

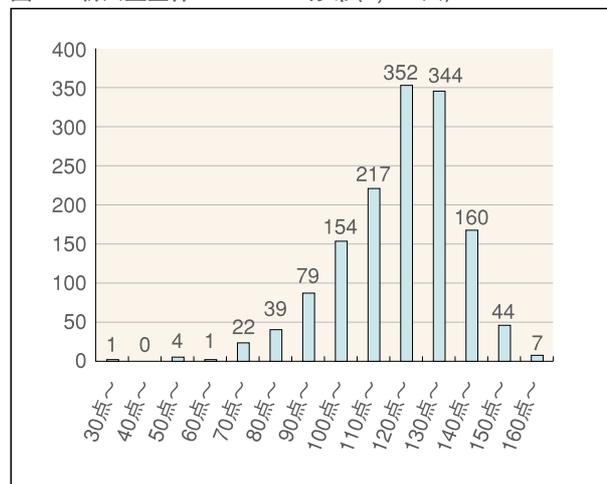


表2 新入生全体のサブ・スコア(1,424人)

	Listening Strategies	Functions	Reading Strategies	Vocabulary	Grammar
平均	1.74	1.69	1.98	2.16	2.14
標準偏差	0.56	0.56	0.67	0.58	0.60

表3 新入生全体のサブ・スコアの分布(1,424人)

	Listening Strategies	Functions	Reading Strategies	Vocabulary	Grammar
1	455	519	333	144	173
2	885	831	785	903	877
3	84	74	306	377	374

第1回FD座談会 佛教大学における外国語教育について (後編)

出席者 ■ 文学部人文学科 太田 修(朝鮮語) / 文学部中国学科 若杉邦子(中国語)
文学部英米学科 松本真治(英語) / 教授法開発室 下野隆喜
前号掲載の前編では対談のうち「語学教師論」「カリキュラム改革」「学びやすい外国語は？」について報告した。今回はその続編である。



使える語学力とは？

松本 語学教師が、それぞれの外国語をペラペラ喋れるのかどうかはどれも個人差があるように思いますが、ではズバリお聞きしますが、ご自身の語学力は？

若杉 私、大したことありません。まだまだです。

太田 そんなふうに聞かれたら「できない」と言うしかないじゃないですか(笑)。

松本 僕も「できない」と言うしかないですけど、それはネイティブへの引け目であって、それでは話にならない。学生がよく言う「英語ができません」とは明らかにレベルが違うわけで。そこで「使える外国語」って何でしょうか。結構巷では使われる割には、これほど曖昧な表現はないと思いますが。さらに、そんな曖昧なものを教えることはできないだろうし。

若杉 自分の意思を明確に伝達できる、ということでしょうか。自分はこの言葉を使うんだ、という度胸も必要ですね。ただ、ある程度の水準に達しないと無理でしょう。

下野 具体的には？

若杉 漢語水平考試8級ですね。大学院入試で求められるのが8級なんですけど、中国語をある程度自由に使えると感じるためにはやはり8級は必要でしょう。

下野 松本先生はTOEFLとかTOEICは何点ですか。

松本 ケンブリッジ大学英語検定のCPE(Certificate of Proficiency in English)は持っています。試験はなんと9時から5時まで。TOEFLやTOEICですが、実は受験経験なしです、あんまり興味なくて。

太田 僕も同じで、そういった語学検定試験には基本的に興味なしです。

若杉 私も以前は興味ありませんでした。上海に留学した時、大学院の授業を受講するためには8級所持が条件だったので大学によるレベル確認(8級以上)のための試験を受けました。結果は合格とのことでしたが、でも合格証書を事務所に取りに行ってないんです(笑)。

松本 テスト結果と外国語ができる実感は違いますよね。TOEICのスコアと実際の語学力との間にはギャップがあります。

太田 でも、ある意味、テストは刺激になっていいですよ。

松本 学生にはどれだけのレベルを求めますか。

若杉 通用するようになるなら、最終的に8級は必要。

松本 学生にとっては相当高いレベルですよ。佛大での4年間の教育では難しいですよ。ごく一部の学生は可能かもしれないが、制度として「漢語水平考試8級」を掲げるわけにはいかないでしょう。

太田 むしろ、そういう資格は意識しないほうがいいんじゃないですか。

若杉 中国語も朝鮮語も、社会的な立場が英語とは違う。英語みたいに「級あればいい」という感覚にはまだなっていないのではないのでしょうか、世間がね。普及度に大きな開きがありますから。

松本 確かに英語の場合、社会的要請は大きいですね。専攻分野に関係なく、4年生大学卒の場合、最低TOEIC 500点前後でしょうか。ただし、昇進や海外派遣の条件によってどんどん高いスコアが求められる。また、公立中学校・高等学校の「英

語科」教師の最低の英語レベルとして、文部科学省は英検準1級、TOEFL 550点、TOEIC 730点を明示するようになりました。実際のところは英検1級やTOEIC 800点くらいが必要でしょう。ただ、英検1級やTOEIC 800点があるからといって国際ビジネスの最前線で働けるわけではない。まあ、その第一歩でしょうか。「国際化=英語(?)」という公式の流れで、上位レベルから下位レベルまでの日本人が英語を学習しているということは否めませんね。明治時代以降の日本における英語教育史を眺めても、英語教育に政策的な要素はたくさん見て取れる。今の時代ではそれが、英検何級やTOEIC何点という形で英語学習を反映させなければならないという形になっている。

太田 英語はどれだけできたかを点数で表さなければならないということが求められているようですが、朝鮮語はそうではありません。

松本 TOEICで何百点あれば就職に有利だとはよく聞きますね。もちろん英語力だけでは就職できないですが、採用側としては他の点で同じであれば英語もできる学生を採用したいらしい。今の時代、中国語なんかでもきたら就職に有利じゃないんですか。その意味では社会的要請もあるのでは？

若杉 今までの話をうかがって、現在中国語の置かれている状況というのは英語と朝鮮語の間だなと言う気がしました。グレードも徐々に認知され、重要視されるようになってきましたし。

外国語教育のあり方

松本 「使える外国語」という概念は、語種・社会的要請・個人等によって異なり、ここで結論を出すわけにはいきませんが、それでも我々は何らかの形で語学を教えていかなければならないわけです。英語の場合、繰り返しになりますが、社会的要請を無視するわけにはいかないので、TOEIC等の試験を意識せざるをえない。そのため、本来は語学教育に必要なモチベーションの部分などがどこかへ行ってしまうということも現実的にはある。楽しい授業を展開し、学生のモチベーションを上げることができればいいんですが、目に見えて効果が出てこないということもある。そうするとつい「楽しんで学ばせる」が「教え込む」という形になってしまふ。中学校・高等学校学習指導要領でもコミュニケーション能力養成と国際理解という2つが「英語科」の柱となっています。ですから大学でも語学力養成と異文化教育の2つをうまくミックスできればいいんですが、何かが抜けてしまふ。

太田 僕はその「何か」は抜けてもかまわないんじゃないかという気がします。我々ができることは限られていますし。問題は学生がやる気になるかどうかということで、やる気にならなければ身につかないと思うんですね。

松本 モチベーションが高まったらいいという考えもあるんですけど、モチベーションというものは測定できない。そして目に見えないものは評価されない。全国共通英語学習意欲度テストなんてものがあればいいんですが、ありえない。意欲があれば自ずと実力もともなっているだろうというのが世間の発想でしょう。語学は実技科目ですから、実績主義ですよ。そこが、語学を教えていて一番辛いところなんですよ。

太田 自分で体験するという学習が一番大事だと思うんですよ。ロサンゼルス分校やハワイ大学の英語研修や、中国・西北大学での漢語研修という短期講座が実施されていますが、いいですね。朝鮮語関係ではまだそのような制度はありません。朝鮮語を「体験する」という意味でも、語学研修のようなものをぜひ実施したいですね。

若杉 中国学科では専門課程の学生の力を伸ばそうと、長期研修制度も計画しています(注:2005年度より実施済み)。

松本 確かにその言語が話されている地域に行くことほど、モチベーションを高めてくれるものはないですからね。

若杉 ただ一つ現地研修に関して気になることは、参加した学生とそうでない学生の差が開くことです。英語・中国語・朝鮮語のどの履修生を考えると、すべての学生がその研修に参加することはありえないし、現実的に言って、費用も自己負担で、全学生が参加することは不可能です。ですから、研修に参加していない学生をどのようにケアするかも一つの大きな問題だと私は感じているんです。

松本 新カリキュラムでは1学年のうち1000人以上が英語を履修していますが、そのうちどれだけの学生が英語圏の地域に行っているのか、その実態はわかりませんが、その大半ということはありません。

下野 近頃は英会話学校に通う学生も多いでしょう。1回30分単位とかで学習するところがありますが、1日その程度の学習ではどうかとも思うんですが。

松本 基本的な発想としてはいいと思いますよ。1年間海外留学をすると、結構話せるようになって帰ってきますよね。ただ、海外に行かなくても、1日2、3時間、効果的な学習を1年続けたら、1年間留学したのと同じくらいの効果があるらしいのですが、ただ、効果的な学習というのが難しい。一つには、自分のレベルよりちょっと上のレベルのもの $i+1$ を学習すればいいんですが、それが理屈で言うほど簡単ではない。ちょっと上のレベルというのが曖昧でしょう。自分自身についてもよくわからないのに、教室に多数の学生がいてね、当然個人差もあるなかで、個々の学生の $i+1$ なんてわかりえないでしょう。実際 $i+2$ や $i+3$ になっているかもしれない。

若杉 そうですよ。ちなみに、語学科目の1クラスの大きさは大体どれくらいですか。

松本 英語は今40人前後です。

若杉 それは、多すぎると思う。

太田 朝鮮語は、今年(注:2004年度) すごく少ないです。15人くらいです。

若杉 教えやすいでしょう。

太田 教えやすいです。

松本 英語は共通試験の結果をもとにレベル分けされたクラスですが、やはり人数はね。

下野 私の時代は五十音順で、60人いました。

若杉 中国語の初級のクラスは、今30人位ですね。理想を言えばもっと少なくしてほしいんですが。

松本 英語教育の分野では、適正人数は15人と言われますね。だから、15人越えたらあんまり変わらない。

太田 そんなに多いと、どうしようもないでしょう。

若杉 それは、言えますね。

太田 こっちが一方的に喋るという感じで…。

若杉 相手の発音を聞いて、時間をかけて直すなんてできないし、1対1のコミュニケーションが成立してはじめて初級の授業って成立するんですが。

太田 グループや、ペアを組んでやりとりする作業もほとんどできないですね。

若杉 そういう根本的な問題は、環境をどう整えるか、という最初の段階からあるみたいですよ。

松本 本学の授業開講数と教室数という点から考えると、少人数クラスは編成できないという理屈は理解できるんですが、でも語学教師という立場からは少人数クラスを訴え続けるしかないというのが本音でしょうか。 <完>

あとがき

第1回FD座談会として、語学教育を担当している若手教員3人が集まり、忌憚のない意見を交換し合うことができたことは、大きな成果である。何らかの会議で顔をあわせても、語学教育に関して議論する機会はめったにない。この座談会が行われた昨年度は太田先生も若杉先生も教授法開発室のメンバーではなかったが、座談会を機に2005年度からは両先生には室員としてご活躍していただいている。たった一回きりの座談会だけで、本学における外国語教育のあり方を語りつくすことは到底不可能なことではあるが、本学における今後の外国語教育の方向性を見定めるための来るべき論争の礎になったということに疑う余地はなからう。

<文責:松本真治>

第2回FD座談会 国語教育について(前編)

出席者 ■文学部人文学科 坪内稔典 / 教育学部教育学科 達富洋二 / 教授法開発室 下野隆喜
今年度は国語教育について座談会を実施した。

学生気質について

司会 現状はどうですか?

坪内 人文学科1回生に半年間入門ゼミで議論します。学生は議論し自由に喋るのが面白いと言いますね。

司会 高校は自由ではないのでしょうか。

坪内 高校は、意外と自由に喋れない、大学も一方的に聞く事が多く、議論は新鮮で面白いでしょう。

達富 坪内先生も楽しんでいるということですね。

司会 達富先生はいかがでしょう?

達富 入門ゼミで、真剣に喋るのが楽しいと言う学生は多いですね。

学生になぜ真剣なのかと聞くと、普段は、結論を喋ることの連続で過程がない。しかし、入門ゼミは議論が面白いらしいです。

司会 結論だけですか?

達富 印象だけかな。

司会 どういう会話ですか?

坪内 普段は、あたりさわりがいい会話をしていないじゃないですか。

司会 社会の反映でしょうか。

坪内 お互いに傷つけない優しい社会で、ということですね。

達富 喋っても「 みたいなとか、 ぼい」と、いうことでま

とめてしまっているようで、話し手も聞き手も、ものわかり良すぎます。全部言わないのに、わかりすぎる。

司会 議論はないのでしょうか。

坪内 ないでしょうね。

達富 寂しいですね。

坪内 寂しいけど、ケータイで済ませて直接行かず顔を見ないことが少なくないでしょう。

達富 距離がありますよね。

司会 顔を合せないのが良いですか？

坪内 楽でしょ。顔を合すと心に入るのでケータイで距離をとるんでしょうね。

司会 それで、満足ですか？

坪内 いや違う、本当に仲良くなれば話します。

司会 恋愛は？

坪内 僕は講義で、句会や歌会をしています。毎回歌を五首作り皆で批評する。殆ど恋の歌です。

達富 願望ですが、本音というか、叫びというか。

坪内 あなたが私の背中を支えてくれて良かったとか、あなたの部屋に何時までいたという歌ばかりです。

達富 直接喋らないで、メールで完結してしまうようですね。

司会 会わないのでしょうか。

坪内 まずケータイで、それを超えたら親密で個人的になるでしょ。

達富 昔より、ひとつ手段が増えたんでしょうね。受話器に向かっては叫ばないんじゃないでしょうか。

坪内 ケータイが生活を変えたんでしょう。

達富 変えましたよね。

司会 ケータイを持たないとどうなるのでしょうか。

坪内 僕は、困らないが、学生はケータイが無いと生きられない。

達富 持っていない人も、持っているふりをするんじゃないでしょうか。ケータイで距離をおく現実と、入門ゼミで熱くなる現実。この二つが面白い。

司会 ケータイが良く、だけど入門ゼミで熱いのはなぜ？

坪内 全体だと熱くなる人が多いのも本当でしょう。ケータイでは難しいですよね。

達富 そうですね。

坪内 四回生でも、顔は知っている程度です。学科で仲良くなならない。

司会 クラブはどうですか。

坪内 クラブは昔風と一緒に酒を飲み、つきあいもする。けど、学科はそうはいかない。

達富 僕が学生時代に熱くなれたのは、語り合ったからでしょうね。教育学部だったから教育に対して本気という共通があったからです。

坪内 教育学部はなりやすい。教師という目標意識がはっきりある。文学部は、必ずしも決まっていないですから。

達富 作家論で熱くなるのか？ 作品論とか？

坪内 それはない、偏差値でたまたまということです。国文と関係なく就職し、学問に熱くなりにくい。

達富 その辺は、教育学部は違いますね。

坪内 多分、そうでしょう。

達富 熱い教師像がありますから。もちろん全員かどうかは分かりませんが。

司会 活字離れとか、語彙が減ったとかありますが。

坪内 本を読まないのは、日本全体です。学生は本代に月で500円くらいですよ。

司会 文庫は？

坪内 買わないでしょう。

司会 勉強機がない？

坪内 ないです。本箱もない。

司会 何がありますか？

坪内 テレビとオーディオ。



達富 少し裕福なら、コンピュータがどんと置いてある。

坪内 勉強機は、コタツです。

達富 僕もそういう学生の下宿に、行ったことがありますよ。

司会 インターネットは？

達富 調べる方法が、本じゃないですよ。

坪内 パソコンが圧倒的です。

達富 機械が教えてくれますから。最近は。

坪内 それはしかし、間違っていないです。

司会 学力は下がってないですか？

達富 僕は学力に、悲観的じゃない。元気な学生はいます。

司会 分数ができないとか聞きますが。

坪内 固定観念で今を見て言うから、環境が変化しても本質は変わらないです。

司会 今も昔も本質は、変わらないのですか。

坪内 多分。

達富 そう、多分。

司会 勉強しているのでしょうか。

達富 大学で鍛えるところがあります。一回生に作文を書かせると小学校以来で、中学高校は受験のことばかり。だけど、書かせると妙に妥協しない。一週間締切り延長しろと言う。何かが夢中にさせているんですね。大学生にとって作文は面白いんでしょうか。

坪内 国語の教師が言葉を面白いものだとして学校で教えていない。言葉はつまらないと思わせている。あれが間違いですね。

達富 そうですね。

坪内 言葉はいつも話すが、言葉がなければ考えない、言葉を楽しいと思えるのと嫌とでは全然違う。言葉は楽しいものだとして、大学の教育で分かるようにしないといけな。

達富 大学の授業を受ければ受けるほど、現場の先生になるのが不安になる学生がいますよ。

司会 不安になるのですか。

達富 やっていきける自信がないから、なるのを辞める学生もいる。

司会 自分は教えられないと決めるんでしょうか。

達富 たとえば、子供の作文の良さがわからない。わからないならわかるようになるまで教えない方がいいと考えてしまう。そんな方法ばかりではなくもっと子どもの言葉の楽しさや弾む気持ちとか一杯あるのにな。

司会 結論のやりとりで、学生が変化しているのですか。

達富 学生の言葉は、変化しています。

坪内 そうです。

達富 僕の頃より、お洒落です。

司会 お洒落？

坪内 僕の時代は、恥ずかしくて人前で話せなかった。赤面症はほとんどいませぬ。僕の頃はいました。

司会 あがってしまう学生はいませんか。

坪内 あがる者は、殆どいないです。

達富 堂々とやりますよね。

坪内 発表します。旨く活かしたら良いです。やはり授業での学生を満足させることですね。関西はサービス精神旺盛で、笑わせようとするよね。桂文珍さんが関西大の先生になると、それは学生へのサービスだと言う人がいる。腹がたつのは芸の難しさの認識がない。我々は話しのプロですけれども落語家には及ばない。芸を馬鹿にするのは駄目です。ある意味ではサービス業でしょ大学の先生は。

達富 芸というと、若者に迎合するように見えるのかもしれないね。

坪内 若者の心を捉えるのが、どれほど大変かわかってない。

達富 若者の心を捉えるのは、名人の技。それならば、名人から学びたいですよ。

- 以下次号 - <文責：達富洋二>